

## 博士学位論文要約

論文題目： 形而上学と倫理—ジャンケレヴィッチとレヴィナス—

氏 名： 田中 優一

要 約：

博士論文「形而上学と倫理—ジャンケレヴィッチとレヴィナス—」で論じるのは、V・ジャンケレヴィッチ(1903 - 1985)と E・レヴィナス(1906 - 1995)の関係である。ジャンケレヴィッチとレヴィナスの関係を考えた場合、ジャンケレヴィッチからレヴィナスを見た研究はないが、レヴィナスからジャンケレヴィッチを見た研究はレヴィナス自身も含めて既にある。それを踏まえて、本論文で、共通の土台を作って両者の哲学の差異と同一性を見るために、いくつかの問題を取り上げる。すなわち、形而上学、死、瞬間、そして道德あるいは倫理の問題である。

両者の関係を考える上で参考になる、レヴィナスの小論がある。それは、『主体の外』(1987)所収の「ウラジミール・ジャンケレヴィッチ」(1985)である。レヴィナスは、まず次のことを指摘する。すなわち、ジャンケレヴィッチの語りは独特であり、その語りを通して「まるで一つ一つの新しい語が、それに先行する語のなかでは予見不可能なものとして湧き出るかのようなものである」。さらにレヴィナスは、ジャンケレヴィッチの思考が独創的で深遠な思考であり、かつ詩的でもあると述べる。レヴィナスの語るジャンケレヴィッチは、決して理解し易い哲学者ではない。むしろ、非常に難解な、読み手を困惑させるあいまいさや難解さや理解し難さを含んでいる。興味深いことに、われわれから見て、この両者は、ほとんど共通の課題に取り組んでいたように思われる。

レヴィナスにとって、ジャンケレヴィッチの何が問題だったのだろうか。レヴィナスによれば、ジャンケレヴィッチの哲学とは、「ほとんど(Presque)」、「ほとんど - 無(Presque-rien)」、そして「何だか分からないもの(je ne sais quoi)」の形而上学である。その形而上学とは、「定義できないもの」や「言表不可能なもの」、「書かれなかったもの(non - inscrit)」や「考えられなかったもの(impensé)」への接近である。いわば、沈黙や語り得ないものへの接近である。レヴィナスは、この語り得ないものを、「意識には捉え難い根源的自由における生の体験」、「出来合いの〈同〉にも現在の平安にも満足できない生の体験」と呼ぶ。レヴィナスが語り得ないものとして指摘した、この「生の体験」こそが、ジャンケレヴィッチにとって最も重要な問題であった。ジャンケレヴィッチは、この〈ほとんど - 無〉を「生の諸瞬間」や「持続の諸瞬間」と呼び、それを彼の形而上学の中心に置いた。名づけられることも認識されることもない、この生きられた「生の諸瞬間」について、レヴィナスは、「ウラジミール・ジャンケレヴィッチ」で次のように言う。「たとえ、それが無限小のものであれ、科学の諸理念が把握する、定立されあるいは十分に検討された実在的なものに比べるなら、これらの瞬間は、ほとんど無(presque rien)ということになるだろう。そ

うであるならば、ほとんど無あるいは《何だか分からないもの》は、《固定された諸観念》の硬直した枠組みに閉じ込められることはあり得ない。この《何だか分からないもの》の意味を語ること、それは新たな考え方や語り方を要求しているのではないだろうか。それこそが、諸事物、諸実体、一般的観念の現れに先立って垣間見られる哲学の問題そのものではないだろうか。この指摘のなかにジャンケレヴィッチの形而上学の課題がそのままある。しかし、この課題はレヴィナス自身の課題でもあったのではないか。では、はたして、ジャンケレヴィッチとレヴィナスはこの課題を新しい考え方や語り方においてうまく解くことができたのであろうか。

この課題はレヴィナス自身の課題でもあったように思われる。なるほど、レヴィナスには、〈ほとんど〉も〈ほとんど - 無〉も〈何だか分からないもの〉も、見当たらない。しかし、本論文におけるわれわれの試みは、先に述べたように、ジャンケレヴィッチとレヴィナスを同じ問題の俎上に載せ、その差異と同一性とを明らかにすることである。というのも、これまでの研究において、両者の関係は、レヴィナスのほうに重点が置かれていたからである。それを修正して、両者を相互照射の関係に置き直さなければならない。もちろん、だからといって、レヴィナスから見たジャンケレヴィッチを決して軽視するわけではない。

このような観点に立ち、本論文は既に示唆したように四つの問題を取り上げ、以下のことを明らかにした。

第一章「二つの形而上学」では、ジャンケレヴィッチとレヴィナスを比較検討することで、二人の形而上学の基本構造を明らかにした。ジャンケレヴィッチの形而上学は経験的なものと超経験的なものとの混合であり、〈ほとんど - 無〉の形而上学である。それは、純粋性や絶対性を斥けたものである。それゆえ、彼は、「全体性」という概念を肯定する。他者も「私」も同じような全体を構成するのである。他方、レヴィナスの形而上学は、学的なものではなく他人との関係における或る種の傾向や態度を表したものである。レヴィナスの形而上学は、ジャンケレヴィッチのような学的な形而上学ではなく、享樂する主体としての「私」の純粋性や他者の絶対性を認めるものである。したがって、ジャンケレヴィッチと違って、彼は全体や全体性を否定する。

第二章「死と他者」では、ジャンケレヴィッチとレヴィナスの死に対する態度と死の意味を解明した。二人にとって死とは、われわれが単純に無に帰することではない。ジャンケレヴィッチにとって、死は端的な無ではなくて生から死への移行の瞬間である。その瞬間がいつなのかは誰も分からない。それゆえ、死とは単なる無化ではない。死は独自の意味を持つ。彼は、そこに生きる希望を見出し、われわれに積極的に生きることを勧める。他方、レヴィナスにとっては、死は、他人との関係をもたらし、自分のために生きることから他人のために生きることへの転換を促す。死は、未来であり、他者であり、「神秘としての死」である。つまり、他者(他性)としての死である。誰もが死ぬ存在である限り、死によって「私」に他人との関係がもたらされる。それゆえ、彼は死との関係が時間であり、時間の他性と他人の他性とのアナロジーを主張した。他人との関係において「私」は、自分に中心を置くのではなく、他人に中心を置いて生きようになる。

第三章「生の諸瞬間」では、ジャンケレヴィッチとレヴィナスの生の諸瞬間について論

じた。ジャンケレヴィッチにとって瞬間は、時間への優位を持っている。なるほど、時間は不可逆的であるので瞬間は消えてしまうが、しかし、この瞬間、あの瞬間が存在したことは取り消せないからである。したがって、彼は瞬間の事実性を強調し、〈ほとんど - 無〉としての瞬間という考え方に到達する。それに対して、レヴィナスの場合は、瞬間の絶対性と瞬間の孤独を打破する時間とが問題になる。瞬間は絶対的なものであるが、しかし、瞬間は孤独である。この孤独を打ち破るために瞬間は、時間を必要とする。瞬間の孤独は、他人との関係によって破られるのである。さらに、レヴィナスにおいては、瞬間は、言語の問題として考えられた。その際、彼は、語り得ないものとしての瞬間を二つの語りにおいて語ろうとする試みをした。彼は、自己同定と同一性の循環に終始する〈語られたこと〉から〈語ること〉への遡及を通じて、語り得ない瞬間的な主体が明らかになると考えた。

第四章「道徳ないしは倫理」では、ジャンケレヴィッチとレヴィナスの道徳や倫理の持つ根源性を取り上げた。ジャンケレヴィッチとレヴィナスは、道徳の重要性という点で方向性が同じである。ただし、他人(他者)の絶対的な優先を認めるか否かで二人は異なる。ジャンケレヴィッチは、「道徳の逆説」が道徳的行為のア・プリオリ性と総合性によって解消されると考えた。なぜなら、道徳においては、道徳的に生きる限り、自分のために生きることと他人のために生きるとは同じだからである。それゆえ、彼は自他関係に或る種の相互性を認める。しかし、レヴィナスは、倫理において、自分のために生きingことを認めない。顔からのメッセージを受け取り応答しなければならない。「私」は、自分のために生きることから他人のために生きることへ転換するので、自己同一的な「私」ではない。「私」は、他人から与えられた責任を果たすことで、非対称的な自他関係に自己自身を置くことになる。

以上のように、ジャンケレヴィッチとレヴィナスは共通の問題に取り組んできたが、違いもあることが明らかになった。それゆえ、最後に、ジャンケレヴィッチとレヴィナスの明らかな違いが、存在をめぐる形而上学と自他関係をめぐる道徳・倫理とにおいて認められることを論じた。すなわち、ジャンケレヴィッチの場合は、〈ほとんど - 無〉の形而上学において、存在と無の二項対立が排除され、真正の経験における超経験的なものと経験的なものとの混合という立場が強調された。自他関係に関しては、両者の相互性が根源的経験とされ存在か愛かという二項対立が同様に排除され、最小限の存在と最大限の愛という仕方では自己と他者との調和がはかられた。他方、レヴィナスの場合は、他性の超越性を説く形而上学の立場において「存在するとは別な仕方では」が求められ、存在論から第一哲学としての倫理学へと移行が強調された。自他関係に関しては、非対称的な間主観性を基礎とした他者の優先性が求められた。応答可能性としての責任において、一者は他者のために無限の責任を負わなければならない。ここでは正義と愛の調和的な関係は失われ、一方的な他者の優先性が主張されることになる。あえて違いを強調すれば、そのように言うことができるのではないだろうか。

ジャンケレヴィッチは、他人のために生きることが自分のために生きることであるという逆説と自分のために生きることが他人のために生きることであるという逆説とを主張したが、第四章で述べたように、この二つの逆説は道徳的行為のア・プリオリ性と総合性において解消される。というのも、ジャンケレヴィッチの言う道徳的行為はあらゆる行為の

可能性の制約であり、例えばデカルトの「われ思う」でさえそれがなければ不可能になるような根源的行為だからである。すなわち、他人のために生きることと自分のために生きることとは道徳において同じ一つの行為なのである。このことは、ソクラテス以来の問題である「よく生きること」に対するジャンケレヴィッチの回答でもある。

また、ジャンケレヴィッチは、自分のために生きることと他人のために生きることとの両立性を主張する。彼の、第一の逆説の徹底化である「死を冒しても他人のために生きること」という議論は、この両立性の問題に触れたものである。ジャンケレヴィッチの道徳形而上学の立場によれば、「死を冒してまで」は〈ほとんど〉死、すなわち死の一步手前であり、どこまで行ってもぎりぎりの所で死なないという事実を示している。これは、「他人のために生きること」の純粹性の拒絶でもある。もしも純粹性の立場が求められるならば、われわれはそのつど死ななければならないことになる。それゆえ、「他人のために生きる」といってもジャンケレヴィッチの言う〈ほとんど〉の道徳形而上学の立場に立てば、「死を冒してまで」の場合と同じように、そこにあいまいさや不純性を認めなければならない。要するに、ただ単に他人のために生きすることは、自己欺瞞によって否定され、その徹底化である死を冒してまでも他人のために生きすることは、今度は、「無化としての死」の否定によって最終的に斥けられる。なぜなら、無化としての死は、完全な死であり、それ以上の道徳的行為を不可能なものにしてしまうからである。もし死ねば、他人のために生きることや自分のために生きることとは何の意味も持たない。

他方、レヴィナスは、顔と責任において自己と他者との倫理的関係について考えた。顔は、「根源的に現前し得ないものの現前可能性」である。それゆえ、顔は現象には還元できない仕方で現象する。顔は、レヴィナスにとって、何よりもまず表現なのである。顔が表現であるとは、それが「形を超えて自分を押しつけること」を意味する。したがって、顔としての他人の命令や要請や懇願は、絶対的なものであり、われわれはそれを無視することもそれに逆らうこともあらかじめ禁止されている。要するに、それが応答可能性としての責任の問題である。われわれは、他人に対して無限の責任を負っている。しかし、レヴィナスが言うように、それは自由の禁止ではない。なぜなら、われわれは責任を負うからといって、一切の行為が不可能になるわけでも自分に対して何もできないというわけでもないからである。むしろ、レヴィナスによれば、他人に従うことによって、道徳・倫理的行為は可能になるのである。表現としての顔は、無関心さの禁止でもある。それゆえ、われわれは、例えば飢えているものに対して目を背けてはならず、何らかの具体的行為をしなければならない。しかも、見返りなしにそうしなければならないのである。かくして、われわれは、他人に対する責任において、自分の存在を維持するという「エゴイズム」を離れ他人のために生きることへの態度変更を求められる。レヴィナスの場合、ここに道徳的・倫理的関係の基盤が見出されるのである。

レヴィナスの言う、このような自他関係の非対称性は、他人の死に対する情動性において明らかになる。すなわち、われわれは、他人の死を前にして、自分の死に対する不安とは別な情動を抱く。他人の死は、われわれを激しく揺さぶる。そのことによって、自己同一性が破られ、自己中心性は疑わしいものとなる。他人の死は、その切迫性においてわれわれに対して不安というよりもむしろ「忍耐」をもたらし、情感性において強い他人との

間の絆をもたらす。他人への近さは、他人の死において際立つ。それを最もよく証示するのが情感性なのである。それゆえ、情感性は他人との関係を考える上で決定的な意味を持つ。『神・死・時間』における以上のような議論は、重要なのである。

上述したことから、ジャンケレヴィッチとレヴィナスについて何を言うことができるだろうか。われわれは、結論として次のように主張する。両者の最大の違いは、自他関係における相互性か非対称性かという問題である。ジャンケレヴィッチの相互性の立場から見ると、レヴィナスの非対称性の立場は多くの問題を含んでいるようにみえる。非対称性の関係では愛の問題が中心であり、正義の問題が後退しているという点は否めない。もしそうだとするならば、デリダが指摘したように、レヴィナスの場合自他関係は暴力の問題を孕むことになる。しかし、この点については留保しておく。というのも、暴力の問題に答えるためには、相互性の観点から再度レヴィナス的な自他関係を捉え直さなければならないからである。

なお、主な引用文献としては、具体的には、ジャンケレヴィッチの主要なテキスト、*Philosophie première – Introduction à une philosophie du « presque »* – PUF, 1953, *La Mort*, Flammarion, 1966, *Le paradoxe de la moral*, Seuil, 1981、また、レヴィナスの主要なテキスト、*Totalité et Infini – Essais sur l'extériorité* –, Nijhoff, 1961, *Autrement que' être ou au-delà de l'essence*, Kluwer, 1973 が挙げられる。主な参考文献としては、一例を挙げれば、ジャンケレヴィッチを扱ったものとして、Joëlle Hansel, *Vladimir Jankélévitch – Une philosophie du charme* –, Editions Mancius, 2012, レヴィナスを扱ったものとして、B. Forthomme, *Une philosophie de la Transcendance, La métaphysique d'Emmanuel Levinas*, La pensée Universelle, 1979, 両者を扱ったものとして、Françoise Schwab, « Levinas et Jankélévitch, professeurs de dénument », in *Levinas autrement*, Peeters, 2012, Flora Bastiani (sous la direction de ), *Bergson Jankélévitch Levinas*, Éditions Mancius, 2017 が挙げられる。